相模経済新聞　2021年8月10日号

宇宙生命哲学

ことはじめ

38

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

ドローンが描く地球とイマジン

13年前、北京オリンピックの開会式では、文字の誕生と印刷技術の発明を思わせる勇壮な中国舞踊が、メイン競技場で披露された。古代文明の発祥の地であることを誇りとする中国国民の自信の表れでもあった。

9年前のロンドンオリンピックの開会式では、産業革命が取り上げられた。この革命は、人類の歴史の中でエネルギー利用の大きな分岐点になっていて、現在の地球温暖化の引き金にもなっている。

5年前、リオオリンピックのテーマは、「平和と環境」で、メイン会場に競り上がってきた緑の五輪は、アマゾンのジャングルを彷彿させた。生命の起源・誕生・進化を思わせる古代生物の躍動、生物の多様性から、民族の多様性、そして世界中から移民を受け入れて、近代国家にまで発展させてきたブラジル国民の誇りが随所に感じ取れた。

今回の東京五輪・パラ五輪の開催について、筆者は、諸般の事情から、勇気ある返上をすべきであると主張してきた。だが、開催と決まった時、その開会式がどのようになるのか強い関心があった。新型コロナウイルスの世界的なパンデミックの中で、当コラムが提唱してきた高次元地球環境生命体としての連帯意識が、何らかの形で表現されていれば、次世代へのバトンが確実に繋がるのではないかと思っていた。

7月23日、開会式の夜、無観客の国立競技場では、日本の伝統的な工芸技術や祭りの文化が紹介され、東京の夜空には、1824機のドローンの編隊で描く「地球」が、躍動する生命のように鮮明に浮かび上がった。会場には、オノ・ヨーコとジョン・レノン共作の「イマジン」が、日本の子供たちと、アフリカ大陸、アメリカ大陸、ヨーロッパ、オセアニアで活躍する歌手によって歌い継がれ、世界的タップダンサー、ジャズ奏者、歌舞伎役者によるコラボレーションにより、地球上の全ての国と地域の絆が表現された。大坂なおみ選手による聖火の点灯は厳かで、クライマックスで奇を衒うこともなく、式典は、近代オリンピアードの本来の姿に戻ったように思えた。

国立競技場上空にドローンで描かれた地球
（IOC公式サイトよりAtushi Tomura/Getty Images）

アスリートたちは、限られた条件の中で懸命に競技し、大いなる感動を与えてくれた。一方では、感染爆発が起こりつつあり、行先は予断を許さない。今回の大会は、五輪の本質を問い直す絶好の機会だと思う。IOC・JOCはじめ、関係する組織・団体の大いなる進化を期待したい。